

「ダイヤモンド・プリンセス」新型コロナ集団感染から5年 検証進まず憤る乗客

3/11 日経ビジネス

「亡くなった14人の死を決して無駄にしたい」



ダイヤモンド・プリンセスの集団感染事故による犠牲者に対して黙とうをささげる当時の乗客ら（日経ビジネス電子版）

冷たい海風が容赦なく吹く2月の大黒ふ頭（横浜市鶴見区）。犠牲となった人々に思いをはせながら、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」のかつての乗客らは色とりどりの花を横浜港の海にささげた。

ダイヤモンド・プリンセスで新型コロナウイルスの集団感染が発生したのは5年前の2020年2月。3711人の乗客・乗員のうち712人が感染し、14人（オーストラリア帰国後の死亡者1人を含む）が亡くなった。

5年前、新型コロナウイルスの検査や治療体制は確立されていなかった。正体不明のウイルスといかに対峙するのか。船内の感染対策や、感染者の受け入れ体制をめぐって手探り状態が続き、ダイヤモンド・プリンセスは大黒ふ頭に停泊。乗客は異例となる長期間の船内待機を余儀なくされた。

その結果が未曾有の集団感染だった。

「あんなにも悲惨なことが起こったのに、全く検証が進んでいない」

かつてのダイヤモンド・プリンセスの乗客らは、当時の対応の不備について口々に憤りをあらわにする。洋上の地獄と化したダイヤモンド・プリンセスは、長きにわたった新型コロナウイルスとの闘いの始まりを象徴する出来事だった。だが5年の年月が過ぎた今、集団感染事故の記憶は風化しつつある。

どうすれば集団感染を防げたのか。かつての乗客や医療スタッフの今を追った。

●無視された感染対策

「当時とはとにかく情報が不足していた。船内にいながら、情報を得るのは船外からだった」

ダイヤモンド・プリンセスに乗船していた乗客の1人、平沢保人さん（69）は、当時の状況についてこのように振り返る。

平沢さんは定年退職によって長期休暇を取りやすくなったこともあり、妻とともにダイヤモンド・プリンセスに乗船した。横浜港を出港したのは20年1月20日。「出港時には新型コロナウイルスなんて全く意識していなかった」（平沢さん）

日本では1月16日の時点で国内初の感染者が確認され、すでに新型コロナウイルス拡大の予兆はあった。しかし船内では、マスクなどの感染対策を施すようなアナウンスはされなかったという。

ダイヤモンド・プリンセスは香港からベトナム、台湾などを経由して沖縄・那覇港に寄港。その後、横浜港へと帰港する予定だったが2月1日、横浜港から乗船し香港で下船した香港人男性が、新型コロナウイルスに感染していたことが判明する。

この時点で、船内において感染が拡大していた可能性がある。下船した乗客が新型コロナウイルスに感染していた情報は、香港当局から即座に厚生労働省や船舶に緊急通報が送られていた。だがダイヤモンド・プリンセスの船内では特段、感染対策が行われず、乗客にも知らされることはなかったという。船内の雰囲気はいつも通りで、乗客同士が交流する「さよならパーティー」も予定通り行われていた。

平沢さんが異変を感じたのは、2月5日の朝だった。

「日本検疫よりすべてのお客様には客室内で待機していただくよう指示がありました。ただ今の時間、すでに船内公共エリアでお過ごしのお客様には客室にお戻りいただくようお願いいたします」

突然、ダイヤモンド・プリンセスの船内でアナウンスが響いた。客室待機の理由については触れられなかった。

「この時は、朝ご飯をまだ食べていないのにしまった、としか思わなかった」と平沢さんは振り返る。だが、ここから乗客らの長い隔離生活が始まることになった。

最初のアナウンスから数時間後、客室待機の理由が乗客らに明かされた。先行して乗客31人に実施されたPCR検査で10人の陽性者が出たこと。そして、これから船内で14日間の隔離が行われることがアナウンスされた。休暇を楽しむ人々であふれるダイヤモンド・プリンセスは、ウイルスの集団感染と長期隔離という地獄絵図と化した。

情報は船の外から

船内隔離が始まったダイヤモンド・プリンセスでは、乗客への情報提供は、感染者数など限られた内容にとどまった。2月8日に3人だったのが9日には6人に増え、10日には65人と爆発的に感染者が拡大していった。しかし、いつまで船内に待機していればよいのか。乗客に対する明確な情報はなかった。

平沢さんらにとっては、客室で放送されるNHK BS放送のニュース番組が貴重な情報源だった。

「いったい厚労省や内閣府は何をしているのか。乗客に真っ先に現状を共有してほしい」夜も眠れないような不安に襲われ、次第にその不安は憤りへと変わった。

平沢さんは、知り合いの支援団体を通じ、政府とダイヤモンド・プリンセスの運航会社に対して、迅速な情報共有などを求める要請文書を届けた。さらにニュース番組の取材に応じるなど、船内の状況を積極的に発信し続けた。

幸いにも自身は新型コロナウイルスに感染しなかった平沢さんだが、同乗した妻の精神状態は日々悪化していった。

「もうこの船から飛び降りる」

長期間の隔離が続いたある日、平沢さんの妻はこう叫んだ。外部との接触を断たれ、心身ともに限界が訪れていたのだ。

妻が飛び降りることはなかったが、平沢さんは当時の対応について、今でも憤りを隠さない。香港当局から緊急通知が来た時点で、船内においてマスクなど感染対策を促す対応が取れていれば、感染被害を防げたのではないか。感染拡大した時点でも、もっと現状を伝える術はなかったのか。平沢さんは検証の必要性を訴える。

●無視され続けた SOS

「なぜ高熱を発した夫は無視され続けたのか」

結婚記念日を祝うため、夫の茂夫さん（仮名）とともにダイヤモンド・プリンセスに乗船した多岐沢よう子さん（仮名）は、現在も当時の状況について疑問を繰り返す。夫の茂夫さんは、ダイヤモンド・プリンセスにおいて船内隔離後、急激に体調が悪化。船内の医務室に電話したものの、対応が後回しになり、命を落とした。

茂夫さんが高熱を出したのは、船内隔離が始まった後の2月7日。平熱が35度台だった茂夫さんの体温は38.2度まで上昇していた。船内隔離が始まる前から茂夫さんはしきりにせきをしていたが、単なる風邪と捉えて、船内の催しにも参加していた。この時点で茂夫さんは、新型コロナウイルスに感染していた可能性がある。

茂夫さんが高熱を発してすぐに、ようさんが船内の医務室に電話したが、手いっぱいだったためか、折り返しはなかった。翌日も電話機のディスプレイに表示される番号に繰り返し電話をかけるが応答はなかったという。ようやく電話が通じたものの、船内のドクターからは「今は手いっぱいのため、手が空いたら連絡する」と言われた。その時点で茂夫さんの熱は39.6度にまで上がっていた。

ようやく医師が部屋にやってきたのは、茂夫さんが高熱を出してから3日後の2月10日だった。動脈血の酸素飽和度を測るパルスオキシメーターが茂夫さんの指に着けられ、測定値を見た瞬間に、医師の顔色が変わった。重症だった。30分ほどで、茂夫さんは担架に乗せられ、病院へ救急搬送された。

2月10日の夕方、搬送先の病院からようさんに電話がかかってきた。

「かなり重篤だって言われたよ。今先生に代わるね」

これがようさんが聞いた、茂夫さんの最後の声だった。茂夫さんの病状は回復せず、翌月に命を落とした。茂夫さんを奪った空白の3日間。ようさんはあの時、いち早く医師の対応が進んでいれば、茂夫さんの命を救えたのではないかと煩悶を重ねる。

今もかつての乗客らは、クルーズ船の対応や医療体制について憤りを感じている。一方でダイヤモンド・プリンセスで感染者の治療に当たった医師らは、当時はまだ正体不明のウイルスであった新型コロナウイルスに対峙し、悪戦苦闘していた。＜次回に続く＞